

東日本大震災が教えてくれたこと

ネイチャーテクノロジー研究会 抄録

東北大学院准教授

古川 柳蔵氏



震災後に被災地を回った。衝撃を受けたのは津波などの自然の力だ。これまでライフスタイルをいかに変えるかを考えられた。皆さんも私も現時点を

「**ライフスタイルのパラダイムシフトに向けて**」

モノづくり推進会議は7月15日、東京・一ツ橋の水会館でネイチャーテクノロジー研究会を開いた。テーマは「東日本大震災が教えてくれたこと」。コーディネーターの石田秀輝東北大学院教授と、古川柳蔵東北大学院准教授が東日本大震災を踏まえながら、限られたエネルギー資源で心豊かに暮らせるライフスタイルや、ライフスタイルをつくり出すための考え方について講演した。講演後の質疑応答では参加者から「現在のまま2030年を迎えた時、どういう時代になっているのか」など質問が絶え間なく続き、関心の高さがうかがえた。約60人が来場した。

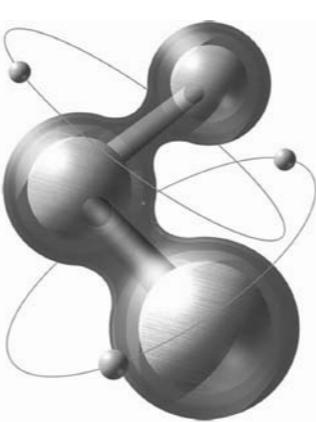


東北大学院教授

石田 秀輝氏

東日本大震災から4カ月強がたった。仙台にいまだ震災の真っ直中という感覚でとても復旧だ復興だという状態ではない、というのが実感だ。震災が我々に教えてくれたものは何か。私は進歩を続けていると信じて

早くやって来た2030年、今考えなければならないこと



モノづくり推進会議

モノづくりへの挑戦

基準として将来を予測する「フォアキャスティング」で動いていることが多い。しかし、それはライフスタイルの部分最適化を見ると、将来から現在まで最適化した上で必要な技術は何かを考えるといつ順序が大事だ。

パックキヤステイングの方法は、まず、環境制約の頭の中に入れ覚えて次にその条件下でどういった社会条件になるかを想像する。例えば、自分が2030年にいる状況のリサイクルがうまくいくことをパックキヤステイングして、くつたライフスタイル。このようにして

「のまいくことはない」という問題が見つかること

の復活になると考えた。そのためには、地域共用電池といふスタイルでは、現在のコニコニティーの崩壊状態を問題視した。問題を解消する方法として、大事なエネルギーを共有することでコニコニティー

の復活になると考えた。そのためには、地域共用電池といふスタイルでは、現在のコニコニティーの崩壊状態を問題視した。問題を解消する方法として、大事なエネルギーを共有することでコニコニティー

の復活になると考えた。そのためには、地域共用電池といふスタイルでは、現在のコニコニティーの崩壊状態を問題視した。問題を解消する方法として、大事なエネルギーを共有することでコニコニティー

の復活

の復活